

## Maugham の歴史小説「Then and Now」論

田 中 正 志

### < 1 >

Somerset Maugham が1946年72才の時にこの作品 *Then and Now* は発表された歴史小説である。モームは歴史小説として、1948年にも *Catalina* を発表し、これでモームの長編小説は終わっているのである。

*Then and Now* (昔も今も) はモーム自身の人生観にもとづく歴史的人物を現代に投影していく小説で、文芸復興期のイタリアの政治思想家マキアベリ (Niccolo Machiavelli 1469~1527) を主人公にしたものである。

モームは創作活動の初期に歴史小説を書いているが出版業者が採用しなかったのでは我々の目にふれずに終わったことを *Summing Up* に述べている。この作品はマキアベリの「フロレンス史」 (History of Florence) を材料としたものでモームのマキアベリに対する関心度の高さを伺い知ることができる。

歴史小説というものにも興味をもったのは、Andrew Lang (1844~1912) が書いた小説論によると言われている。ラングは小説論の中で若輩の作家は自分が生存している時代の諸々の感情、風俗を書くなどの人生経験を積んでいないので現代小説を書くには力不足だから、歴史上の人物に若い情熱を与え、ロマンを追求することが最上であろうと述べている。

モームは *Liza of Lambeth* (1897) の成功で新進作家として世に出たばかりで、ラングの主張に共鳴し「ある聖者の半生」をかくのだが失敗する。歴史小説を書くには人間的成長もなく、また、歴史観、人間に対する洞察力そして小説に要求される想像力が未熟であった。

*Summing Up* の中でモーム自身、当時、想像力が欠けていたこと、そして、

想像力とは訓練によって成長するものであり、一般の考えとは反対に、未熟な青年より円熟した大人の方が強いものであると次のように述べている。

Fisher Unwin must have been dismayed when he received it. It was a novel set in Italy during the Renaissance and it was founded on a story I had read in Machiavelli's History of Florence. I wrote it because of some articles by Andrew Lang that I read on the art of fiction. In one of them he argued, very convincingly to me, that the historical novel was the only one that the young author could hope to write with success. For he could not have sufficient experience of life to write of contemporary manners; history provided him with a story and characters, and the romantic fervour of his young blood gave him the dash that was needed for this sort of composition. I know now that this was nonsense. In the first place it is not true that the young author has not sufficient knowledge to write about his contemporaries. I do not suppose one ever in after life knows people so intimately as those with whom one's childhood and early youth have been passed. One's family, the servants with whom so much of a child's life is spent, one's masters at school, other boys and girls — the boy knows a great deal about them. He sees them with directness. Adults discover themselves, consciously and unconsciously, to the very young as they never do to other adults. And the child, the boy, is aware of his environment, the houses he lives in, the countryside or the streets of the town, in a detail that he can never realize again when a multitude of past impressions has blurred his sensibilities. The historical novel calls surely for a profound experience of men to create living people out of those persons who with their different manners and different notions at first sight seem so alien to us; and to recreate the past needs not only a vast knowledge but an effort of imagination that is hardly to be expected in the young. I should have said that the truth was exactly contrary to what Andrew Lang said. The novelist should turn to the historical novel towards the end of his career, when thought and the vicissitudes of his own life have brought him knowledge of the world, and when, having for years explored the personalities of people around him, he has acquired an intuition

into human nature that will enable him to understand and so to recreate the figures of a past age. I had written my first novel of what I knew, but now, seduced by this bad advice, set to work on a historical romance. I wrote it in Capri, during the long vacation, and such was my ardour that I had myself awakened every morning at six and wrote with perseverance till hunger forced me to break off and have breakfast. I had at least the sense to spend the rest of the morning in the sea. <sup>(1)</sup>

モームの歴史小説に対する見解をこのことで知ることができるのである。従ってラングの小説論の歴史小説に対する考え方はモームの論点からみると正しくないということになる。モームは小説家は思索や生活の転変によって、世の中の知識を得、また、周囲の人々の個性を永年探究して、人間の本性をえぐる直観を獲得し、過去の時代の人物を理解し、それによって再現できるようになる晩年にこそ、歴史小説に向うべきであるという結論に達し、まさにその通り、72才でこの作品を発表することになる。

## < 2 >

この作品のマキアベリは文芸復興期イタリアの思想家であり、政治家、歴史家、作家でもある。モームがマキアベリを主人公として小説を書きたい願望は上記の *Summing Up* の引用に明らかである。

では何故、モームはマキアベリに興味をもったのであろうか。

モームは *A Writer's Notebook* の中でロマニアでチェザレ・ボルギアの許に滞在したマキアベリの話で、その滞在が彼に「君主論」の最もよい材料を与えたのであり、その時の話の中に、マキアベリの戯曲「マンドラゴラ」の素材になっている事柄を織り交ぜようと思う。

この作家、即ち、マキアベリはしばしば、ほんの些細なことらしい自身の経験した事件から fiction を造り上げ、ただ、自分の創造力だけでそれを面白く劇的にしたことが分かるのでモームはその過程を裏返してたまたまあの劇の土台となったと思われるいくつかの事件を推測してみたら面白いだろうと考えて

---

(1) *The Summing Up* p.p.162-163

書いたのがこの作品“Then and Now”（昔も今も）であると説明している。

モームがマキアベリに対して共鳴する一面として宗教観から考えてみる必要がある。マキアベリは人間はキリスト教的道徳に束縛されない自由をもって諸々のこと、特に、政治に対して現実を凝視するという視点で自己を解放し、個人の主体性を重要視する。モームも経験主義的考え方からこの思考に共感するのは肯定できる。

### < 3 >

この作品は1502年10月6日マキアベリが友人ピアジオ・ブオナコルシ (Biagio Buonaccorsi) の甥の18才の青年ピエロ・ジャコミーニ (Piero Giacomini) と共に二人の使丁を連れてフィレンツェ市からイモラに向かって旅立つ。

マキアベリは33才の青年で、フィレンツェ自由市を治める市会の書記である。当時、イタリアの都市は抗争状態で加えて、スペインやフランスの介入で外交関係は輻輳そのものだった。マキアベリはかつてフランスに公使として勤務した経験があり、そのことが認められイラモに駐在していたチェザーレ・ボルジヤ (Cesare Borgia) との交渉に当たせられることに市会が決定したのである。

イラモに到着したマキアベリはチェザーレの秘書長のアガピト・タ・アマリア (Agapito da Amalia) を通じて公に面会する。その後バルトロメオ・マルテーリ (Bartolomeo Martelli) という有力者を訪れる。バルトロメオはピアジオ・ブオナコルシと遠縁の関係になり、イモラに着いたら面会するように言われていたのである。しかし、彼の家で紹介されたその妻アウレリア (Aurelia) の美しさに好色のマキアベリは魅せられてしまう。

バルトロメオはアウレリアと20才も年齢が離れた夫妻で結婚して三年になっても子宝に恵まれない。

マキアベリは策略をねって、バルトロメオと親しい関係を構築していく。夕食に招かれ、マキアベリはアウレリアが自分に関心があると信じる。次にフィレンツェ市が四旬節に説教する僧侶をバルトロメオにフラ・ティモテオ (Fra Timoteo) を紹介させ、そして、ティモテオを晩餐に招いて、マキアベリがア

ウレリアに恋をしていること、子宝に恵まれれば本人は勿論その母親が血のつながった相続人を得ることになり、その家族にとっては最高の幸福を得ることになるのだから善をほどこすことになると僧侶を説得し25ダカットを寄進する。金貨に僧が歓心を示したことを察知したマキアベリはバルトロメオにサン・ヴィターレ (San Vitale) に参拝すれば子宝に恵まれるとすすめて、家を一晩留守にするようにしてくれと僧にたのむ。

計画は首尾よく運んでいたが運命のいたずらで本懐をとげることなく、帰国の支度をしていた時にバルトロメオの訪問をうけ、アウレリアが子宝に恵まれたことを告げられる。その後、アウレリアの相手がピエロであったことも判明する。

愚弄されたマキアベリは自嘲的になるがこの題材で劇を書こうと思いつく。舞台はフィレンツェにしてマキアベリ自身を主人公カリマコ (Callimaco) と命名し、アウレリアはルクレチア (Lucrezia) という名で登場させ、カリマコはアウレリアと一夜を共にハッピーエンドで終幕させるという設定に。

四年後、イモラに反乱があり、バルトロメオは危機におちいったが教皇の軍に参加していたピエロの助けで命は助かった。しかし、その後、追放され、死亡。バルトロメオの財産は教皇の信頼を得たピエロが管理し、加えて、未亡人アウレリアと結婚。そのことを聞いたマキアベリは絶句する。

#### < 4 >

この作品はマキアベリが喜劇「マンドラゴラ」を執筆する筋道を説明する展開になっている。登場人物の性格模写、諸々の人間模様などはモーム独特の手法による創作である。

マキアベリとピエロの二人の人間関係の逆転的運命の結末は老境にある72才のモームの巧妙な筆致で人生の皮肉を描写している点がこの小説の最大の面白味であろう。

モームはマキアベリズム、即ち、反キリスト教思想を基にした近代政治思想を基にした近代政治思想をこの作品の中にとり入れている。それは第五章で

「裏切者は、やはり裏切者として扱われるべきだ。キリスト教的な徳を用いることによって国家が治められることなんてことはない。国家は思慮と大胆さ、決断と無慈悲さによってはじめて治めることができるのだ」とヴァレンティノ公に言われている。またこの小説の終わりに「ボルジアは犯した罪の報いを受けたんだと君は言う。しかし、彼は自身の悪行のためじゃなく、自分で統御できない環境の故に破滅したんだよ。彼の邪悪さは、まったく関係のないことなんだ。罪と悲哀にみちたこの世の中で、もし徳が悪に打ち勝つことがあるとしても、それは徳であるから勝ったのではなく、より優れた、より強力な武器をもっていたからなんだ。もしも正直が二枚舌を圧倒したりしても、それは正直の故に圧倒したのではなくて、より有効に指揮された、より強い軍隊をもっていたからなのだ。さらにもし善が悪を打ち負かしたとすれば、それは善なるが故ではなく、たんまり金の入った財布をもっていたからなんだ。神が善人を愛することは、もちろん私たち信じなければならんよ。だけど、馬鹿者が愚かなことをしたからとて、神がその馬鹿者を救うっていう証拠はまったくないんだよ」。まさにこれこそ、モームがマキアベリに共鳴していることを証明する言及であろう。

また、この小説ではマキアベリとヴァレンティノ公との対話の場面が多くとり入れられていることから“Somerset Maugham: A Guide”の著者Branderはこの作品を「政治小説」とさえ言っている位である。しかし、この説にはどう考えても同意できない。

モームはこの小説の笑話的主人公の結末を最後まで明らかにせず、あっと驚かす手法の巧妙さをここでも発揮してピエロに凱歌をあげさせ、マキアベリを奈落の底に落とす。

しかし、マキアベリは政府からの重要人物として認められた自分よりも金も権力もない若者ピエロにアウレリアが傾いたことに分別のない奴だと考えるがそれ以上にマキアベリ自身が策におぼれた奴としてみなされるところに笑劇性があるように思える。

この小説はマキアベリという歴史上の主人公が喜劇「マンドラゴラ」(Mandrachola) をどうして書くことになったかということ、を仕組む構成をとりつつ、モーム自身の創作活動が老令と共に衰えつつあることから創作に対する衝動をかきたてていると言ってもいいであろう。

< 5 >

主人公マキアベリが権謀術策を企み、そして、その策におぼれ、自分が受けた嘲笑を解消しようとする。

「確実な善と不確実とが予測されるときに、その不確実な悪をおそれるあまり善をなさないのは間違っていることをあなたがアウレリアに説明して下さいればよかったのと思います。確実な善とは、あの女性が身ごもって不滅の魂を創り出すことで、不確実な悪とは露見するかも知れぬということです。この方は適当な注意を働かせれば避けられるものです。また、罪ということでは、これはなんにも罪にはならないことなんです。というのは、罪を働くのは意志であって肉体ではないからです。彼女が自分の夫を不快にさせることは罪でしょうが、この計画では、彼女は夫を喜ばせるだけなんですからね」<sup>(2)</sup> (p116)

主人公マキアベリが自分の屈辱を自分には関知しない他人の出来事のように企だてるところを見てみよう。

「最初、彼は嘔吐しそうに思ったが、やがてある靈感に打たれた。自分のこの体験のなかには一篇の劇がありそうだと、思い浮かんだ。しかも、劇化することは、自分をからかい、自分から奪った者たちへ復讐にもなるんだ。自分はやつらをひとまとめにして、軽蔑し嘲笑してやろうか。そう思うと、いままでの不機嫌はなくなってしまい、馬上でいろいろと想像力をめぐらしているうちに、彼の顔は悪意にみちた喜びで輝いてきた」(pp232-233)

若輩ピエロに逆転された悔しさをイソップ物語のキツネのように叫ぶ。

「芸術にくらべれば愛など何であろう」と彼は繰り返した。「愛は一時的だが、芸術は永遠だ。愛は生まれた日から死ぬ日まで、病気と悲哀、嫉妬と憎悪と悪意にさらされるであろう生き物を、この墮落した世界の中へもたすべく、われわれをさそう自然の策略でしかない。このマカロニーはわたしが期待したよりも上手に煮えているし、ソースも濃厚で滋味に富んでいる。かしわの肝と臓物だ。人類の創造は、悲劇的な誤りではなく、奇妙な不幸であった。それを正当化するものは何か。それは芸術だと思う。ダンテ、カトウルスそしてペトラルカだ。そして、もし彼らの生活が苦難に満ちたものでなかったら、おそらく彼らはけっして神品を書くように駆り立てられはしなかったであろう。なぜなら、もしわたしがアウレリアとベッドをともしたのだったら、わたしはけっして劇を書くことなどを思い立たなかったであろうことは、間違いないからである。だから、事態をよく見てみると、これはすべて最善に向けられているのだ。私はがらくたを失って、帝王の王冠を飾るにもふさわしい宝石を拾い上げたのだ。」(p236)

歴史小説としてのこの作品は16世紀の初めのイタリアを背景にしたものだがこの小説のタイトル「昔も今も」よりもっと適切なタイトル「会話小説」と呼ぼうと思っていると Karl G. Pfeiffer にモーム自身が言及しているのは興味あることだと思う。それはこの小説が動きのない場面と会話の連続にすぎないからだということが理由だったらしいが、すでにそのタイトルを他の作家が専有しているということでその考えを変えさせたと Pfeiffer は自分の著作 *William Somerset Maugham* の中で述べている。

結論的に言うところの作品は歴史小説であることは明白で、16世紀という時代を探求し、その時代に生き傑出した人材を追求し、人間性とその時代、時代の人間の運命をリアリズムと審美主義を調和させた作品と言える。

## &lt;Bibliography&gt;

- Maugham, M.S. ; Then and Now. Heinemann, 1974  
 The Partial View, Heinemann, 1954.  
 The Summing Up, Heinemann, 1938.  
 Brophy John; Somerset Maugham, Longmans, Green, London, 1952.  
 Calder, R.L. ; W.S. Maughan and The Quest for Freedom, Hinemann 1972.  
 Maugham, Robin; Somerset and All the Maughams, Greenwood Press  
 Publishers, 1977.  
 Jonas Klaus W. ; The World of Somerset Maugham, Greenwood Press  
 Publishers. 1972.  
 Maugham Ted; Somerset Maugham, Jonatham Cape, 1980.  
 Maugham Ted; Maugham A Biograpy, Simon and Schuster New York.  
 1980.  
 Pfeffer, Karl G. ; W.Somerset Maugham: A candid Portrait London:  
 Golancz, 1959.  
 Maugham, Robin; Conversation with Willie, Recollection of W.Somerset  
 Maugham New York, Simon and Schuster, 1978.  
 Burt, Forrest D. ; W.Somerset Maugham, Twayne Publisher, Boston 1985.  
 Curtis, Anthony; Somerset Maugham (Writers & their Work) Windsor,  
 Berkshire, England, 1982.  
 Somerset Maugham, Macmillan Publishing Co., Inc. New York. 1977.  
 「サマセット・モームの全小説」 越川 正三著 南雲堂  
 「モームの世界」 相良 次郎著 評論社  
 「モームの研究」 中野 好夫編 英宝社  
 「モーム」 上田 勤著 研究社  
 「モームの二つの世界」 山川 鴻三著 京都あひろん社  
 「サマセット・モーム小説群」 越川 正三著 関西大学出版部  
 講座・イギリス文学作品論 高見 幸郎著訳 英潮社  
 「サマセット・モーム」  
 20世紀英米文学案内19 朱牟田夏雄編 研究社  
 「サマセット・モーム」  
 「モーム文学の魅力」 井出 良三著 大阪教育図書  
 外国文学研究序説 山内 良樹著 ミネルヴァ書房